



## 福祉ネット「ナナの家」会報

福祉インタビュー：会報 27号（2006年8月発行）



田中さん（左）と会員の皆河くん

### 第24回福祉インタビュー

## 田中千鶴子 さん

昭和大学保健医療学部看護学科助教授  
NPO レスパイトケアサービス「萌」代表  
訪問看護ステーション「あい」アドバイザー

聞き手：皆河える子

#### <きっかけは・・・>

皆河：今日はせっかくのお休みのところ、訪問看護ステーションの開設準備会に参加して下さり、ありがとうございました。

田中：おめでとうございます。頑張ってください。

皆河：引き続きで申し訳ありませんが、インタビューの方もよろしくをお願いします。堅くなりますが、そちらの子ども専門の訪問看護ステーション「萌（もえ）」を立ち上げたきっかけは何だったか教えてくださいいただけますか？

田中：元々は私の3番目の息子が脳に障害があって、いろいろと私も家族の立場で苦労することがあったので。私は看護師の免許をもって教える立場にいたのですが、障害児を育てる大変さを自分が体験してはじめて家族の立場がわかったというか、医療ケアがあったりすると家から一歩も出られないとか、兄弟がいても授業参観にもいけないとか。そういう家族にいっぱい出会って。

皆河：うちもそうでしたね。

田中：それでたまたま私が病院外来に子どもを連れて受診している時に、隣のお母さんが経管栄養の弟さんと保育園年長さんのお姉ちゃんを連れて受診していて、お姉ちゃんに「もうすぐ運動会だね？」と話しかけたら、「下の子が生まれてからお姉ちゃんの運動会行けたことがないんですよ。」というお母さんの返事。それで「どうして？」と聞いたら、「弟の医療ケアは自分にしかできないから他の人に預けられないし、運動会のような埃の多い場所に連れていけないので。」と言うのね。

皆河：お母さん行きたいでしょうね？

田中：保育園の年長さんの運動会というのは花形です

よね。実は私も保育園で子どもを育てたものですから。それでよほど行きたいだろうなと思って、「じゃあ私看護師だけ見てあげると行って行ったら？」というのが始まりでした。帰ってきた時にお父さんとお母さんとお姉ちゃんがすごく嬉しい顔してて。私はそれまで病院の看護しか知らなかったの、本当に目からうろこでした。それから何回かそのお宅に行くようになり、またそのお母さんの口こみで広まって、というのが12年ぐらい前の出来事ですね。

皆河：それが発端だったんですね？そこからボランティア団体になり、NPOになっていった訳ですね？

田中：4年まえにNPOにしたのは、支援費が使えるのというので。同時に訪問看護にすれば医療費を使えますので、家族の負担が少なくなるというのと、スタッフもボランティアでやっているよりは、仕事として責任ややりがいもあるだろうと考えて。

皆河：私たちが経路は違いますが、同じ所に行き着きそうなんです。自分以外にこういう障害を持つ子をみてくれる人が育ってくれないと、成長が不安になってしまいます。萌（もえ）に続け！と思っています。色々なことを勉強させて下さい。この文を読んでぜひ萌（もえ）の事知りたいたいという方には、先ほど見せていただいた「萌」のビデオお見せしてもいいですよ？

田中：はい。

#### <今どきの看護学生>

皆河：じゃあちょっと話題ははずれて。お仕事は看護大学の先生でしょうか？

田中： はい。私が教えている分野は基礎看護学といい、体の拭き方、血圧の測り方、注射の仕方など、ベースの部分の科目なので、1～2年生が対象になりますね。で、今の若い方はタオルを絞るといいう経験も日常の中にあまりないので、患者さんの体を拭くといってもタオルをねじって絞ることもうまくできないんですね。「タオルはこうやって絞るのよ。」とか。床に平気で座りますので、清潔・不潔や感染予防を教えるのに「床は汚いのよ。」とか、そこから教えないといけなくて、大変ですね。

皆河： もう少し前はしっかり者の人が多く集まった感じがしますが・・・。

田中： 私たまたま若い頃から学校に入ったので、もう教育暦が20年近くなりますが、すごく変わりましたね。

皆河： 変わりましたね。私も10年間看護医療予備校で講師していて感じました。

田中： 最近はメールでのコミュニケーションというのか、人間関係が希薄な学生が多いような気がします。夜を徹してディスカッションとか昔の大学生はそうだったじゃない？夜通し熱くしゃべって、そういうのしてないのて逆に難しいですよ。人を理解するのが苦手らしい。「あなたがそうされたらどうなの？」って言われても、考えたこともないみたいな。人を理解する前に自分のことが分からないので、「あなただったらどう思うの？」、「あなただったらどうして欲しいの？」って問いかけをしますが、初めてそんなこと聞かれたみたいな顔する学生がいます。だから自分はどうして欲しいのか？とか、自分はどうしたいのか？とか、こういうことされたら自分がどういう気持ちになるか？とか、あまり考えずに暮らしているみたいな。全員そうというわけではないんですが、

皆河： そうですね。そういえばうちの下の子もそうかも。

田中： 皆河さんは雅史君の他にも？

皆河： ええ、3人子どもがいて一番下が22になります。で上は私と共通語を話す子ですけど、下の子は新しい時代の子で180度違います。

田中： うちもそう。3番目の子は亡くなってしまいましたが、あとの2人の男の子は、同じ兄弟でも両極端だったりします。同じ遺伝子もっているのね。

## <気功の力>

皆河： 話を戻しましょうか？大学のお仕事が週に何回かあって、その他には何をなさっているのですか？気功法？

田中： どうして知ってるんですか？(笑) 気功を始めたのは、その3番目の障害の子がきっかけで。すごく腸の動きの悪い子で、たぶん脳の神経の関係もあったと思いますが、うちがでなくてすごく苦労していました。いつもお腹が張っていて。たまたま知り合いにうちの子こうなのよって話をしたら、どれどれと言って5分位立ち話しながら息子のお腹に触るでもなく気功して「ちょっと様子みて。」と言ってくれました。そしたら次の日、それまで下剤をしてもウサギのうんちみたいなしか出なくて、ラキソベロン飲ませると効きすぎて吐いてしまったりとうまくいかなかったのに、本当に次の日、3歳位の幼児がするぶっといううんちで15センチ位のが出て。

皆河： すごーい。

田中： 写真に撮ってありますよ。本当に感動してね。

皆河： うんうん。

田中： そんなことがきっかけで、自分もしてあげたいと思って10年位になりますけど。

皆河： それが会得できれば、私も子どもにやってみますか？

田中： もちろんできますよ。でも、私は自分の子どもが生きている間は、忙しくてなかなか気功モードになれなかったですね。

皆河： あのラキソベロン使っているお子さん結構多いじゃないですか？小さいお子さんがあの容器1個使ったりしていますよね？で私旅先にあれを持って行って、ほんの数滴水に入れて飲んでみました。そしたらお腹がよじれて絞られて、すごく辛い思いして。いつも息子が「お腹が変、お尻が変！」と言っていたのがやっと分かった。

田中： えー。

皆河： それでラキソベロンはやめました。その後二分脊椎の病気を持つ子の親御さんからマグネシウムがいいよと言われてそれを使うようになり、今はなんとか。だけど十分ではない気がしますね。

田中： 気功モードですね。

皆河： 私にも課題ですね。気功モードにどうやったらなれるのか？

田中： あのね、私が習った気功は日本気功といって、自分はパイプ役になって大地と宇宙の気を相手に送る。ただ自分はパイプ役でつつぬけ状態なので自分の気は別に減りも増えもしないし、逆に自分がパイプになることで自分自身も。

皆河： よくなる？

田中： 楽になる。楽になったなーという感じがする。

皆河： お忙しいのに、どうしてそんな時間が作れるのですか？気功モードの。

田中： やはり自分にいいからでしょうね。二瓶先生もなさっているんですよ。

皆河： えーっ？二瓶先生(旧国立成育医療センター神

経科医長) は実はこの「ナナの家」でヘルパー養成講座の講師をして下さいましたよ。その中でも面白いお話がいっぱいあって……。人間は昔人魚だったとか……。

田中：胎児期という意味？前世という意味？

皆河：前世かなー？

## <私の前世は“葉っぱ”>

田中：私の前世は“葉っぱ”ですよ。

皆河：えっ？どういうこと？

田中：木の“葉っぱ”。

皆河：どうして？

田中：どうしてといても、説明すると色々ありますが……。

皆河：感じるの？絶対自分が“葉っぱ”だったって。

田中：そうそう。色々な現象をつなげて行くとそうなる。だから私は毛虫が大嫌いとか色々あります。何時間でも林の下で。

皆河：いられるのね。

田中：例えば私の研究室は北向きで陽が当たらないんです。トイレに行く時だけ長い廊下の日射しがさんさんと入っている所を通るんですけど、お陽さまに当たると、お陽さまの方を向いて「あー、光合成しなくっちゃ！」って思うんです。日光浴じゃなくて光合成なんです。後も浴びなくちゃってひっくり返って。そういうのをいくつかつなぎ合わせるとね。私はへびとか虫とかトカゲとか持てるんだけど、毛虫は失神するくらいダメ。

皆河：じゃあ、毛虫が好きな“葉っぱ”？桜とか？

田中：食べられちゃう。

皆河：そう、毛虫に食べられちゃう“葉っぱ”ですね。でもそれを調べようとは思わないの？

田中：気にはしているけど、突き止められないの。着るものとか何でも色はグリーンが好きだし。あと障害のあった息子の名前が萌(もゆ)っていうんですよ。私が“葉っぱ”だと思いう前につけたんですよ。

皆河：知ってたんですねー。自分の体がねー。面白いな。

田中：理由もなくすごくお城に惹かれるとか。理由もなく何かに惹かれるってあるじゃないですか。こういう場所に行って見たいとか。気功をやっているからそういう感覚や第6感といわれる元々人間にはあった能力が活かしているのかも。今は情報がいっぱいすぎたり、頭だけで色々判断して……。

皆河：退化してきた。

田中：退化しちゃったんだよね。私なんかもう学生の時から科学的根拠とかの世界で、40歳の時に気功習い始めた頃は科学的な発想しかできなかつ

た。それが変わりましたね。5分位の間、触れたか触れないかで気功して次の日うんちが出たりすれば、信じないわけには……。科学的根拠はわからなくても現象は事実だから。

皆河：海外でも科学者の多くが信仰持ってますしね。

## <毛穴を開く？>

田中：私は気功と一緒に野口体操というのもやっているんですけど。西洋の解剖学的な考え方ではなくて、体は皮膚という皮袋に7割の水の入った水袋だと考えるんです。水っていうのは、どんな形にでもなれる。液体でも、固体にも、気体にもなれる。

皆河：気体になったらうれしいですね。空飛べますね。

田中：うーん。そういうイメージを作りながら体を動かしていくという体操なんですけど……。

皆河：忙しくても十分遊んでいるみたい……。

田中：要するにアメーバーみたいな感じ。外の世界と自分の中の世界が行き来自由な、毛穴が全部開いて中の細胞が出たり入ったり。しかも閉じることも出来るし、固体にも気体にもなれるとイメージしながらするんです。ずいぶん前に琵琶湖学園に講演に行った時、終わった後、雑談をしていた時に、婦長さんに「田中さんは毛穴が全部開いたような人ですね。」と言われて。もう少し「オープンマインドな人」だとか言う表現もあるでしょうに！でも、その時ゾーツとしたんですよ。

皆河：うれしかった？

田中：うれしかった！毛穴を開くことは、野口体操の究極の目標ですから。

皆河：あまりロマンティックな表現じゃないけれど、それは響きますね。

田中：そういう社会通年と違った発想。ある意味障害児なども生産能力とかね、そういう今の社会の価値観からすれば、違う価値観でしょ？そういう見方にいろいろ接していると、あまり「こうじゃなければならぬ」とかいうのがなくなりましたね。

皆河：もともと柔軟性のある方の方ですよ。御両親から受け継がれたものですか？

田中：いえいえ。変わったんですよ。やっぱり萌(もゆ)を生んでから。

皆河：今とっても面白い人ですよ。(笑)

## <萌(もゆ)ちゃんの贈りもの>

田中：萌(もゆ)のお陰です。いろいろあって悩んだり考えたりしても、死にやしないという発想を萌(もゆ)からもらった。最初はいい子にとか……。

皆河：うちでも偏差値なんかくそくらえっていう風になりましたね。

田中：萌（もゆ）はお腹の中の8ヶ月の時に、脳が50%しかないというのをCTで見せられてしまったので。

皆河：辛い出産になりましたね。

田中：ナースなので妊娠中にいろいろ思ったりして。生まれてくる意味はあるんだろうとかいろいろ考えてるのがお腹の子に伝わってしまうんじゃないとか。こんなこと思っている親のお腹の中で育ちたくないだろうな・・・とか。治療の方法もなかったし。ある時、夫にきちんといろんな可能性について話したら、ずーっと黙って聞いていた夫が、「どんな障害があっても、二人の子どもだから責任もって自分がみるよ。」って言ってくれた。それまでにいるんな人がいる言ってくれたけど、一歩踏み出せなくて・・・。

皆河：背中をどーんと押されましたね。

田中：それから、生かされてるなーとか、なるようにしかならないかなーとか。あんまりジタバタしなくなりましたね。

皆河：強くなりますよね。ところで最近ハマっていることとかありますか？

田中：ん～、、、。私は27歳で第1子が生まれて男の子3人生んだんですけど、子育てしながら仕事ずーっと続けてて、3人目の子に障害があったので、35歳ぐらいから5年間ぐらい障害児施設で非常勤のナースとかをしていたんですけど、若い時の方が遊びというか、こどもの国に行ったり、海に行ったりとか。山は、夫婦で登山家だったので、子ども達が小さい頃から3000メートル級に連れて行ったりとか。子どもたちに遊ばせてもらっていたんだなーとすごく思いますね。3番目の子が亡くなったら外に出かける気力が無くなってしまいましたね。仕事も若い時とは違う責任が生じて、子どもも成長して親より友達の方が良くなって。

## <「あい」へのエール>

皆河：私が田中さんと話らしい話をしたのはまだ3回目ですが、何だか昔から知っている方みたいですねー。

田中：あー、でもそれって障害児の親の集まりでも、昔から知っている感覚にすぐなれますよね。

皆河：そういえば、息子の無痛無汗症の仲間からの初めての電話でも、すぐに親戚のような気持ちになりましたね。

田中：肌が合うって感じがわかる。

皆河：じゃ、私も“葉っぱ”の親戚なんですか？  
(笑) それでは最後に現在準備中で、田中千鶴子

さんにアドバイザーをお受けいただいた、訪問看護ステーション「あい」へのエールをお願いしますか？

田中：本当にいいことをやっていけば、人もお金もついてくるなーというのがボランティア時代から12年になりますけど、「萌（もえ）」をやっている実感なんですね。採算とろうとか、企業として成り立たせようということよりも、障害の子や家族に教えてもらって、どういうニーズがあるのか？どういうサービスがほんとはいいのか？ということに向き合っていさえすれば、人もお金も自然とついてくるんじゃないかと思います。

皆河：ありがとうございます。素敵に楽観的ですね！（笑）私もいいこと始められそうな予感がしています。本日はありがとうございました！これからもよろしくお願い致します。